本当の思いやり

群馬県　太田市立城東中学校　三年

内藤　仁南

「将来の夢は、パイロットです。」

「ピンクのやつがいい。」

「サッカーしようよ。」

「子供が熱を出したので、有給取らせてください。」

今の台詞を、言葉だけで考えたとき、あなたに聞こえてきたのは、男性の声ですか、女性の声ですか。

鳥肌が立ちました。私は無意識に、それぞれを男性のもの、女性のもの、と決めつけてしまっていたのです。

これは、とある企業のCMで、ジェンダー平等や、社会の偏見について考えるきっかけをつくるために、企画されたのだそうです。

男女平等の考えが世に広まってきて、私自身、かなり理解がある方だと思っていました。

しかし、幼い頃からすり込まれてきた、「こ

れが男」、「これが女」という概念は、私の脳に染みついてしまっていました。

このように、知らず知らずのうちに固定観念に囚われ、人を差別するような考えをもってしまっていたと気づかされた体験を、このCMを見て思い出しました。

友達と近所のカフェに行ったときのことです。注文をしようとすると、「私は耳が不自由なため、指差しでのご注文をお願い致します」というメッセージカードを見つけました。少し驚いたけれど、指差しや、ジェスチャーを使って注文することができました。その店員さんは、明るく素敵な笑顔で接客をしてくれて、「障がいがあっても、障がいのない人と同じように仕事ができるんだ。すごいな、頑張ってほしいな。」と、感動したことを覚えています。

ところが、このことを母に話すと、「障がいがあっても、っていう考え自体が、差別に繋がることもあるんじゃない。」と返され、私

はハッとしました。障がいのある人を応援しようという気持ちが、かえって差別に繋がってしまっているのかもしれない、と気づかされたのです。

しかし、誰かを応援したり、理解しようとしたりすることは、誰もが暮らしやすくなるための「配慮」でもあると思います。

例えば、トイレの男女マーク。赤と青で色が区別されていたり、男性はズボンで、女性はスカートをはいているような形だったりして、差別のように感じる人もいるかもしれません。しかし、マークの色分けがされたのは、一九六四年の東京オリンピックにて、男性の多くがスカートを身につけている国もあり、形だけでは分かりづらいだろうという考えから始まったのだそうです。形が違うのも、色覚異常をもつ方への配慮から変えたのだと知りました。

このように、少し差別に感じることも、誰かの配慮や、気遣いからなるものなのだと、

私は思います。障がいがある人に、私たちが悪気なく発した「すごい」や、「頑張れ」といった言葉は、当人たちにとっては嫌かもしれません。逆に、嬉しく感じる人もいるかもしれません。相手の思いを完璧に理解することは難しいですが、考えてみることならできるはずです。

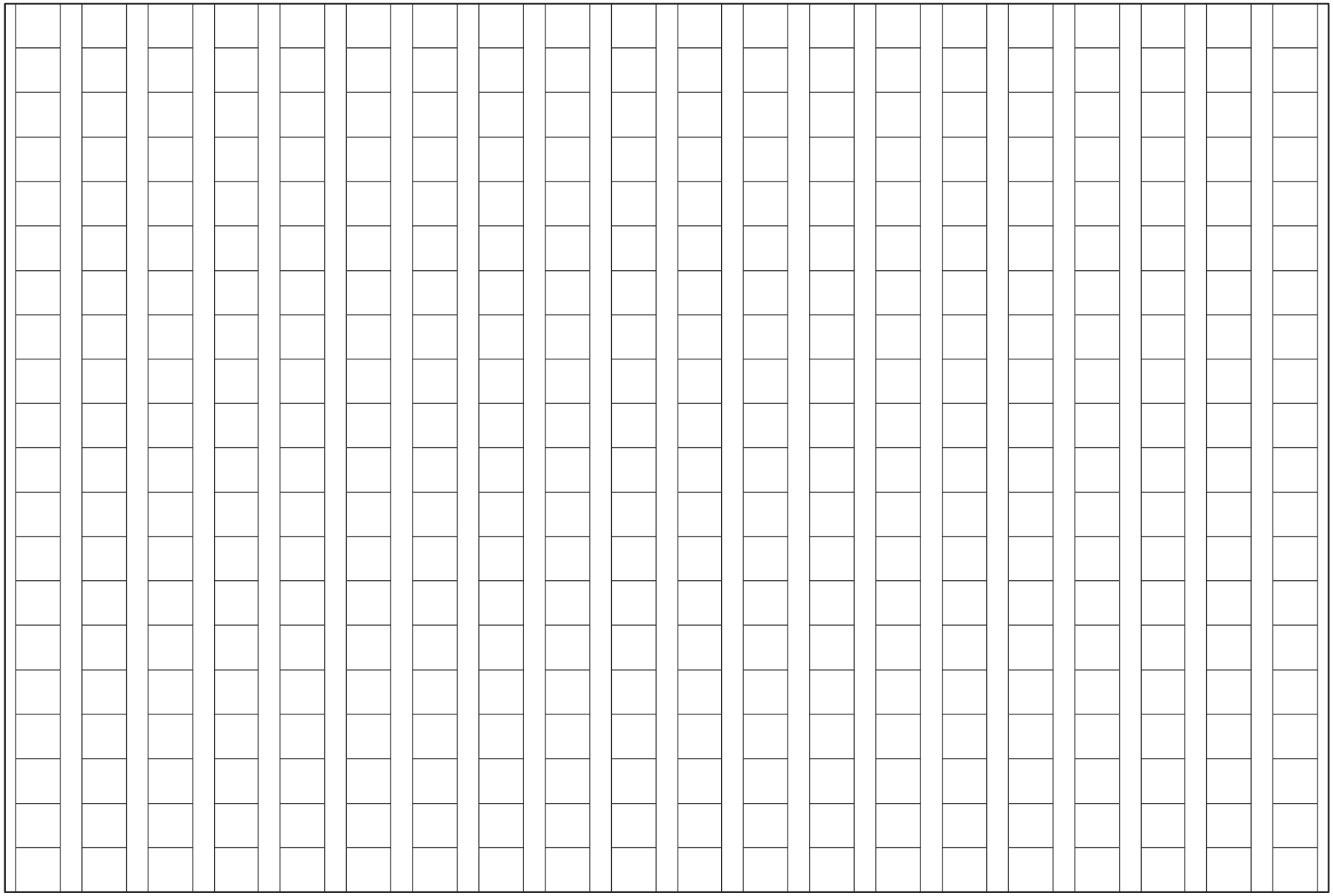
また、伝え方一つでも、相手を思いやることは大切だと感じます。「女は家で家事をしろ」や、「男は外で働け」ではなく、「それぞれに得意、不得意があるから、助け合って いこう」という伝え方なら、みんなが良い気持ちでいられるのではないでしょうか。自分がした配慮は、しっかりと相手に伝わればきっと、差別ではなくなると思います。

これまでのことをまとめて考えると、全て「思いやり」に繋がる気がします。もちろん、必要以上に気を遣って誰かを腫れものの ように扱ったり、相手を明らかに下に見たりする のは いけません。男だろうが女だろうが、障

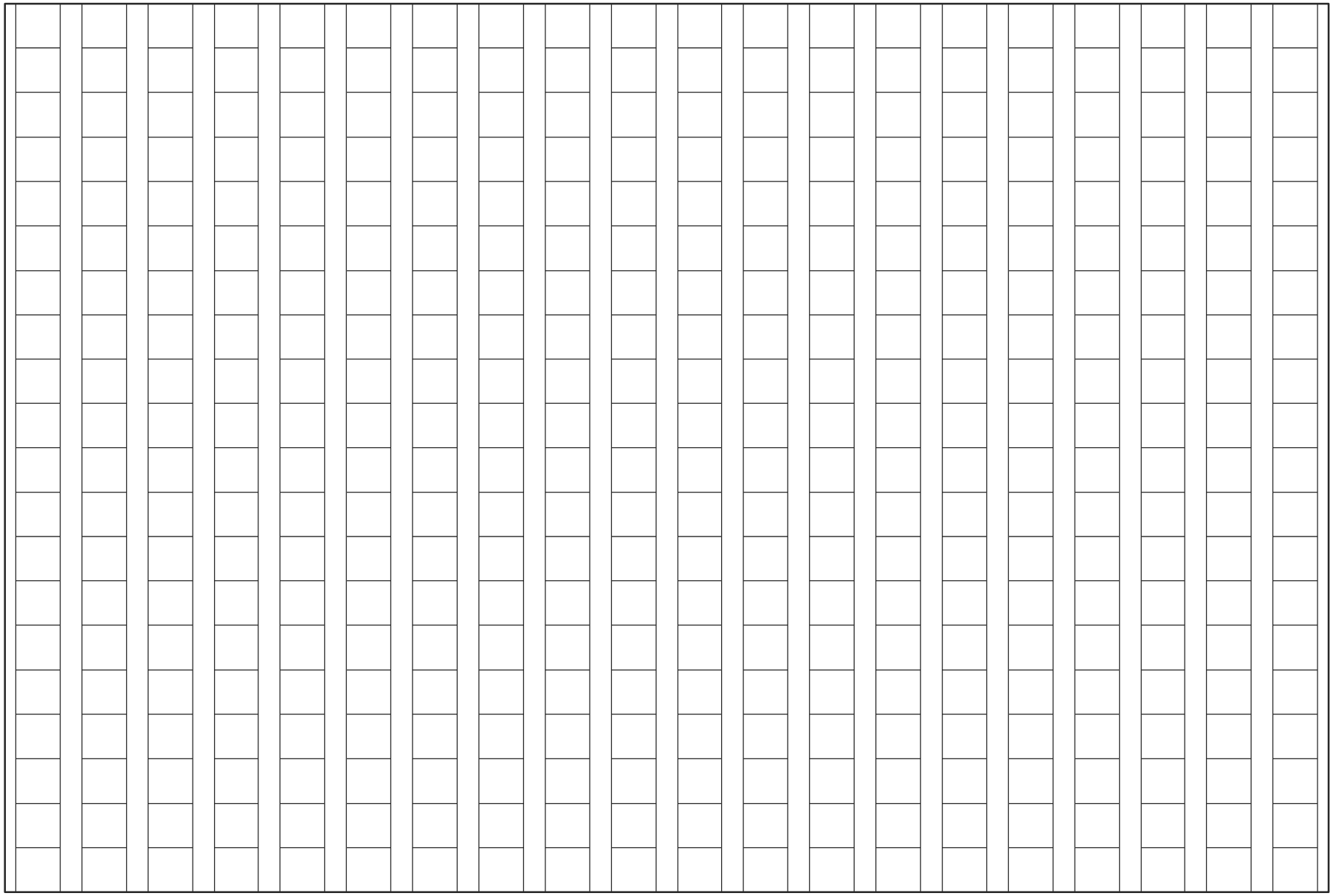
がいがあろうがなかろうが、私たちは皆、同じ人間です。しかし、考え方は人それぞれで、正解はありません。だからこそ、一人ひとりが相手のことを想い、考え、自分なりに接してみることが大切だと思います。

誰もが平等で、暮らしやすい社会を、少しずつ、一緒につくっていきませんか。

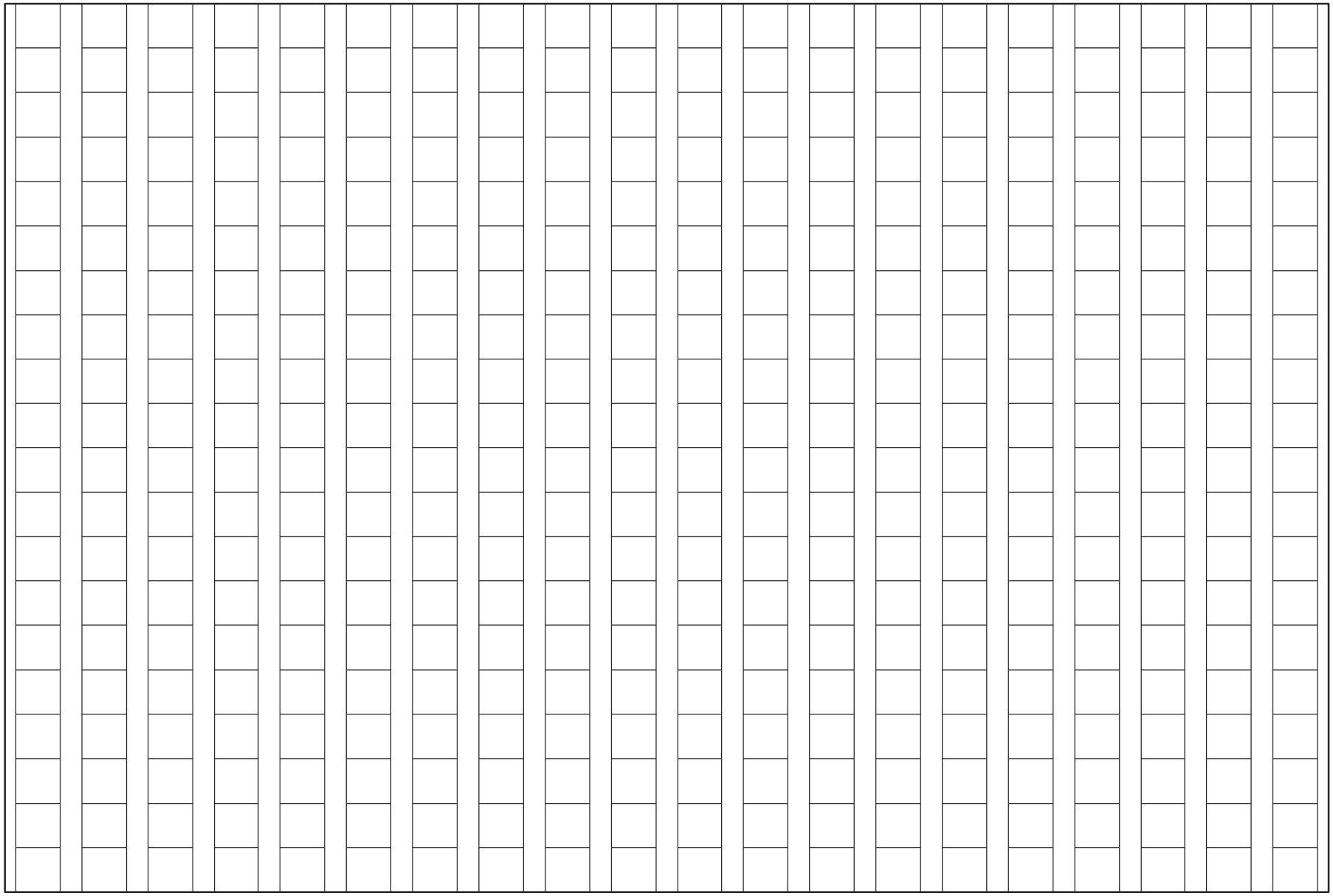
、20 × 20



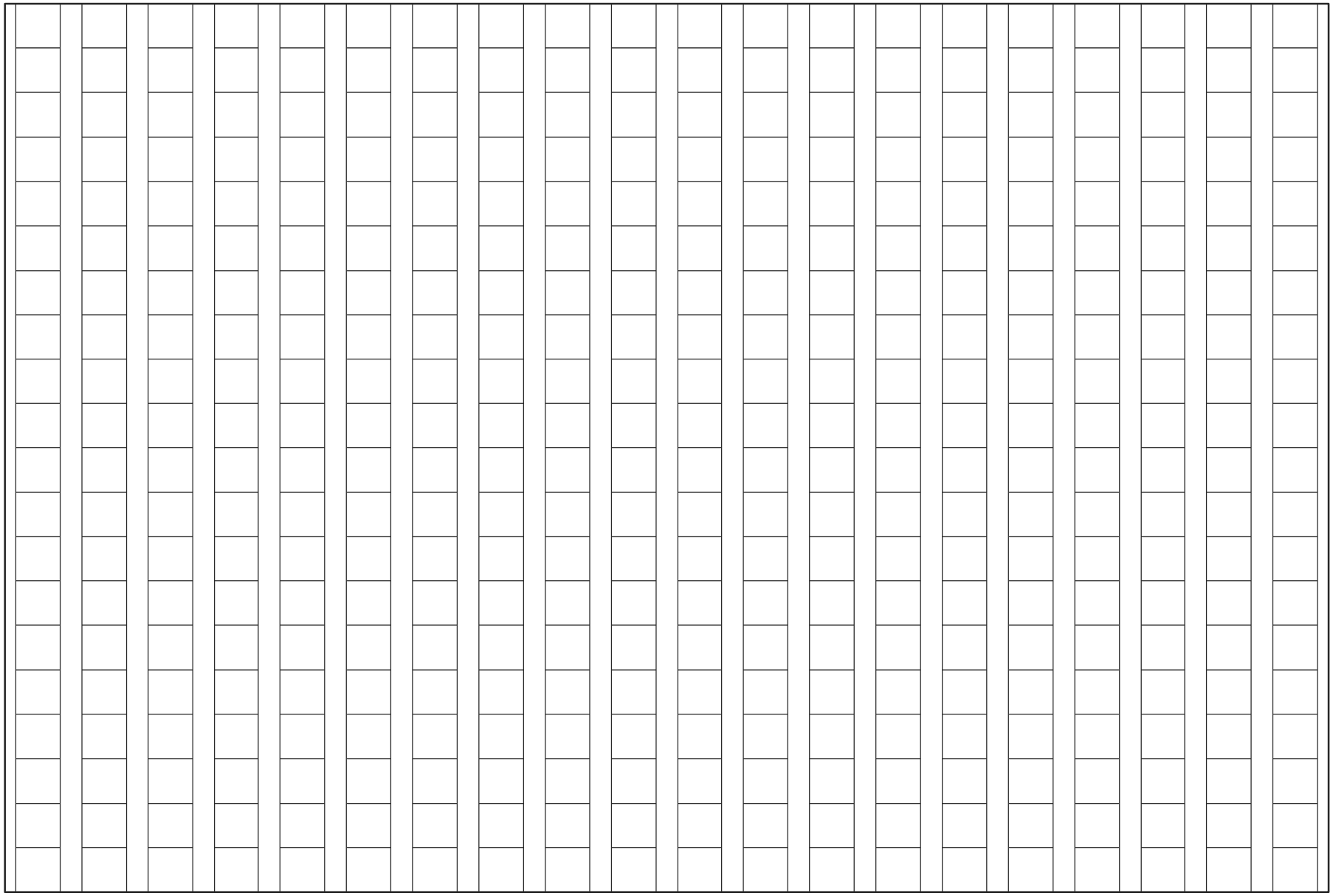
20 × 20



20 × 20



20 × 20



20 × 20